

歴史人口学で探る幕末京都町人の生活

著者	浜野 潔
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	49
ページ	2-3
発行年	2004-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024008

歴史人口学で探る幕末京都町人の生活

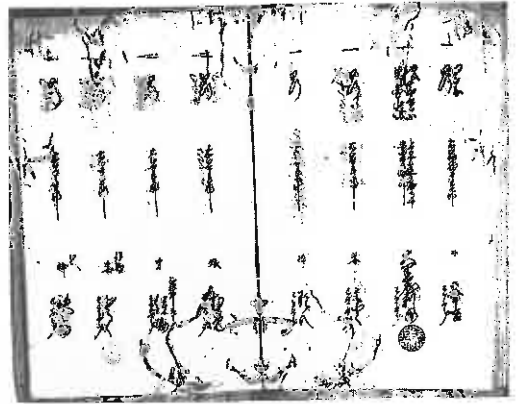
浜野 潔

京都を訪れる観光客が今年は非常に多いと聞く。その原動力の一つは、香取慎吾が近藤勇を演ずるNHK大河ドラマ『新選組!』らしい。京都は戦災に遭わなかったお陰で町の構造が基本的に江戸時代のままであり、当時の建物も少なからず残っている。地図を片手に歩けば、新選組の活躍した場所をそのままたどることができる。これは、江戸（東京）や、大坂（大阪）ではほとんど期待できないことであり、京都が歴史の町として多くの人を魅了する理由でもある。

京都に残る江戸時代は、町並みや建物に限らない。一般の目に触れることはほとんどないが、旧家には膨大な古文書が今なお伝えられており、歴史史料の宝庫でもある。私の専攻は近世日本の歴史人口学という分野であり、主に「宗門（人別）改帳」とよばれる今日の戸籍や住民票に相当する史料を使って、人口・家族・労働などの歴史を研究している。これまで全国各地をこの史料を求めて歩いてきたが、京都には宗門改帳を含む数多くの近世文書が残されており、都市の歴史人口学を研究する最適の場所と確信するにいたった（まとまった複写資料が「京都市歴史資料館」で公開されていることは特筆できよう）。

現在、いくつかの町の史料を平行して分析を続けているが、その中の一つに花車町というところがある。旧市内の北西部、千本通と今出川通の交差点を少し上がったところであり、ここから東側一帯が西陣とよばれる一角である。いうまでもなく西陣は江戸時代の日本で、もっとも有名な織物生産地であった。今でも裏通りに入ると機織の音が聞こえてくるが、江戸時代の花車町は表通りもふくめてびっしりと機屋がならぶ町だった。1850年頃の史料によればこの町には約60軒の家があり、その中の8割ほどが織物業に従事していたことが判明する。

花車町では1819年（文政2）から1868年（明治元）まで50年間の内、36年分の宗門改帳が残されている。この史料に記載されたデータをコ



花車町宗門人別改帳（1857年 [安政4]）

ンピュータに入力して分析すると、江戸時代の京都西陣で暮らす人びとの生活を鮮明に描き出すことが可能となる。まず家族について見ると、平均世帯規模は3～4人と比較的小さい。要するに夫婦と子供数人からなる世帯が典型的な家であり、さらに単身世帯も比較的多かった。こうした世帯の半数は手間織・糸練などの下請職であったが、花車町にはほんの数年しか住まなかった者が圧倒的である。彼らの多くは借家住まいであり、頻繁に家を替わった。家財道具も少ない当時は、引越といってもそれほど手間がかからない。職が変わったり、あるいは家族が増えたりして家が手狭になれば、すぐに新しい場所に移ったのである。

もっとも、数は少ないがこの町にずっと住んでいる家もあった。たとえば、大黒屋伊助家は、史料のカバーする50年間ずっと花車町に住んでいた4世帯の中の一つである。嘉永年間の史料によると、この家の商売は「生高機 縺子織渡世」であり、絹織物のための高機を備え高級品である縺子織を専門にする機屋であった。大黒屋は、1803年（享和3）に商売を始めたと記載されているが、これは当主伊助が41歳の時であった（年齢は当時の習慣に従い、すべて数え年表記である）。この家の世帯規模はかなり大きく、7人から17人の間にある。もちろん、この

中には奉公人が多数含まれていた。たとえば史料の始まる1819年（文政2）の世帯構成を見ると、戸主、妻、男子、女子の4人家族のほか、下男3人、下女2人が雇われており、全部で9人が暮らしていた。伊助の仕事がうまくいっていたことは、奉公人の数が少しずつ増えていることから想像できる。彼は、1830（天保元）年68歳で隠居して息子の利助に家督を譲り浄雲と改名したが、その後も長生きして1846年（弘化3）84歳で没した。彼は間違いなく成功者であったといえるだろう。

しかし、花車町の生活も楽なことばかりではなかった。この町の人口は、観察できる50年間のうち、2度の大きな落ち込みを経験している。最初の落ち込みは、1836年から1837年（天保7～8）にかけてであり、世にいう「天保の飢饉」が襲ったのである。この1年間に花車町では人口が32%も減少した。当時の史料には「西陣諸織物捌けず。前代未聞の事にて、いか程下値にても買取くれ申さず。これにより、休機同前なり」と書かれており、西陣が未曾有の不景気となったことが明らかである。

天保の飢饉は、冷害や大風雨といった自然災害によるものであり、東北を中心とした北日本に大きな打撃を与えた。しかし、人口変動を見ると西日本でも、とりわけ都市部で大きな減少があったことが判明する。花車町の史料を見ると1836年の「難波人取調書控」という史料が興味を引く。この史料は町内で施米を受けた30世帯について戸主名を記したものであるが、特に施米を2倍受け取った15世帯については、その職業、世帯員の名前と年齢、さらに難波の理由まで記されていて、世帯の様子を具体的に知ることができる。それによれば、9割近い世帯が「商売が暇」であることを難波の理由にしており、経済的理由が大きかったことが明らかとなる。さらに注目されるのは、病人がいるとした世帯が3割ほど含まれること、また、男性世帯主の死亡のためか女性が戸主となった世帯が6割にも達していたことである。この記録は天保危機が単なる凶作ではなく、何らかの伝染病による死亡危機だったという最近の学説と符合する。

花車町がこの期間に経験した2度目の人口減少は、1858年（安政5）から1861年（文久元）

の3年間であり、人口はこの間31%も減少した。この原因は、1858年の日米修好通商条約締結を受け、翌年6月に横浜・長崎・箱館の三港が開かれ自由貿易が始まったことである。同年10月には早くも西陣に深刻な影響があらわれた。西陣織にとってもっとも大切な材料である生糸が横浜で大量に買い付けられたため値段が高騰し、しかも国内市場に回る品物が不足状態となったからである。

人口減少の理由は二つあった。一つは開港の年からすぐにはじまった世帯の減少である。借家層を中心に転出するものが転入を大きく上回り、3年間で世帯数は24%の減少となった。もう一つは奉公人の減少である。こちらは、契約があらかじめ年季で決まっていたためか、減少は1年遅れて開港の翌年から始まる。1859年に49人いた奉公人は2年後の1861年には30人に減ってしまった。減少率は39%と世帯の減少率を大きく上回るペースである。その後も奉公人の減少傾向は続き、1868年（明治元）にはわずか10人にまで減ってしまった。先述した大黒屋伊助家はすでに長男利助の代になっていたが、1859年に9人いた奉公人を1860年には7人、1861年には6人に、そして1868年には5人にまで減らしたのである。

このように、宗門改帳が教えてくれる情報はきわめて豊富であり、幕末の京都に生きた人びとの生き方を鮮やかに描いてくれる。彼らは、新選組のように歴史の表舞台に登場することはなかった。しかし、こうした一般の町人も物価高騰、伝染病、経済不況といった危機を乗り越えて、したたかに生きてきたことを史料から読み取ることが可能である。京都の歴史人口学は、このように都市史研究の新しい地平を切り拓く可能性を秘めた分野なのである。

【関連論考】

浜野潔（2003）「水と町衆が生み出す暮らしの勢い」『水の文化』第14号（<http://www.mizu.gr.jp/>）

浜野潔（2003）「近世都市の経済危機と人口—京都西陣の事例から—」『関西大学経済学部論集』第53巻 第3号